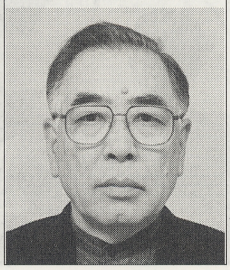
東京清陵会だより

第 10 号
編集・発行人
東京清陵会
(諏訪清陵高等学校同窓会
東京支部)
会長 寺島敏郎
事務局 〒120-0005
足立区綾瀬2-31-7
(株)小野包装気付
TEL 03-5680-7633
FAX 03-5680-7665
E-mail: tseiryo@papiacargo.co.jp

新事務局体制の発足にあたって

会長 寺島敏郎（50回）



会員の皆様のますますのご健勝をお慶び申し上げます。

昨年の総会で藤森宏一氏（63回）の新事務局長への就任と、それに伴う事務局の移転、体制の変更を大枠でご承認いただき、既に活動を始めておりますが、このことは、今後の東京清陵会運営の根幹にかかわる重大事でありますので、経緯を含めやや詳しくご報告して、ご理解を得たいと思います。

当初、諏中・清陵高校同窓会東京支部として発足した東京清陵会は、既に通算四十年に及ぶ歴史をもつことになります。草創期のことは私自身も殆ど存じませんが、もともと有志の集りでしたから、整った事務局があったわけではなく、私の知る限りでは、小口禎三氏（36回）が支部長に就任されて以後、故尾澤賢一氏（37回）が事務局長（これは通称で、規約上の正式名称ではなかったようです）を引き受けられ、卓抜なアイデアと実行力でその基礎を築いて下さったと聞きます。これについては、本号に小口さんご自身が「追悼 尾澤賢一君」と題して懇篤な追悼文を寄せておられますので、ぜひお読みいただきたいと思います。

尾澤さんが病に倒れられたのち、村上利雄氏（39回）、故保延醇一氏（41回）が相次いで事務局長を引き継がれ、三千人を超える会員の動向の把握、会費の徴収、会合の通知、出欠の集約などの煩雑かつ大量の仕事を永年に亘ってつとめて下さったおかげで、東京支部の骨格が整い始めたわけです。もとより事務局といっても、右先輩方のご自宅であり、しかもすべては手作業で、奥様方までを巻き込んで殆どボランティア的に営々と続けられてきました。

一九八八年（昭63）、小平祐氏（42回）が、増澤譲太郎氏（41回）の後を承けて支部長に就任され、程なく林尚孝氏（52回）が事務局長を引き受けられました。かねがね「あの厖大な仕事を手作業で続けるのは限界に来ている。早くデータベース化しなければ」と考えていた林さんは、ご自宅を事務局に、ただちに名簿を核とする会員のすべての情報をコンピューター入力し、データベースを作り上げました。

一九九三年、東京支部は、関東一都六県ほかをカバーする地域の広大さ、四千人を超える人員規模の大きさ、独自活動の多様さなどにもとづき、同窓会支部としての機能を十分に保ちつつ、名称を「東京清陵会」とし、小平会長のもと、組織や規約を整備しましたが、その中心となった林事務局長の献身と各年次幹事の協力によってその内容も充実を見せ、総会の出席人数も飛躍的に増えました。

一九九七年、小平会長が退任され、不肖寺島が会長を引き継ぎ、淵上良子さん（56回）と林さんが副会長に就任されましたが、林さんは事務局長に後任を得られないままの兼任でした。

林さんは大学教授・学部長としての劇務の傍ら、日常的な会員からの連絡の応対、会員の異動に伴うデータの変更・整理、執行機関としての文書作りや通知の発送、会費納入状況の把握や未納者への督促、苦情や照会への対応と処理、日々の克明なメモ、結集の思わしくない学年次への心配りや激励まで、超人的な仕事を十二年近くつづけて、東京清陵会の今日の隆盛の礎を築いて下さいました。この間の林さんの事務局活動が、極めて緻密かつ多岐にわたっていて、簡単には後任を得られないまま日時が経過しましたが、林さんが定年を迎えられることになり、事務局長の交代、新事務局の設置は焦眉の課題となっておりました。

昨一九九八年、幸いにして、藤森宏一氏が同期（63回）の方々のサポートによって事務局長就任を承諾され、一方、既に「東京清陵会だより」や通知類の発送を依託して深い信頼関係にあった（株）小野包装の社長小野寿勇氏（58回）のご厚意で、同社内に事務局を置き、情報管理のベテラン揃いの同社に事務局の日常業務を依託できることになり、小野さん自らも事務局次長を引き受けて下さることになりました。

これらの状況を幹事会にご報告し、ご承認を得たことによって一気に展望が開けました。

林さんが永年に亘って築かれた日常事務は、その継続性に留意しつつ、できるだけ簡素化し、FAXやEメールを活用しながら事務局長と事務局との

（十三面五段へ続く）

1999年度 東京清陵会定期総会案内

日時 平成11年10月15日(金) 午後6時(受付開始午後5時)
場所 アルカディア市ヶ谷(私学会館)「富士の間」
千代田区九段北4-2-25(03-3261-9921)
市ヶ谷駅下車徒歩2分
(JR、地下鉄有楽町線，南北線，都営新宿線)
議事 (1)1998年度会務・決算報告
(2)1999年度事業計画・予算案
(3)その他

懇親会 **会費 8000円**
当番幹事＝66回生，次期当番67回生，サブ幹事76・86回生
ご面倒ですが出席・欠席いずれの場合でも同封の返信用ハガキに御記入の上，**9月30日**必着でご返送下さい．
本年度は会場が変わり，アルカディア市ヶ谷になりましたので，お間違えにならないようにご留意下さい．

特集1

Our Youth Days

私たちが

この第十号の編集の担当学年に当たった私たち六六回生が生まれたのは、戦争が終わる前年からその年春までの間のことです。

一九六〇年、高校入学の私たちを待っていた最も大きな出来事は、日米安保条約改定を巡る全国的な騒乱の中、静かな環境を取り戻してほしい、と学友会全員で行った諏訪市中のデモ行進でした。声を上げるな。私語を慎め。笑うな。体育館の床に座って、数十時間に及んだ激論の末、県内初の高校生のデモを行うにあたって、私たちは真剣でした。

同級生たちから、在学中の古い写真と短い思い出の文章を集めてみようと思い立ったのは、あのときひたすら黙々と歩いていた自分たちを話題にしたときでした。高校を卒業し、故郷を離れて三十数年になる今なお、自分の中にあのころの真摯な思いがある。折に触れて、例えば「千万人と雖も吾ゆかん」というような、伝統の言葉がふと浮かんで来る。あの青春の「熱く燃えた日々」の記憶が、体に染み込んでいるためだろうか。一夜、そう語りあい、この特集の企画を立てました。

一九〇〇年代最後の年。これは他の世代の方々にも語りかけようとする、私たちの「自分史」のひとこまです。





藤森　恒春●昭和38年清陵柔道部員の面々。深志高校との親善試合で小生OBとして審判を務める。最後列右から二人目。

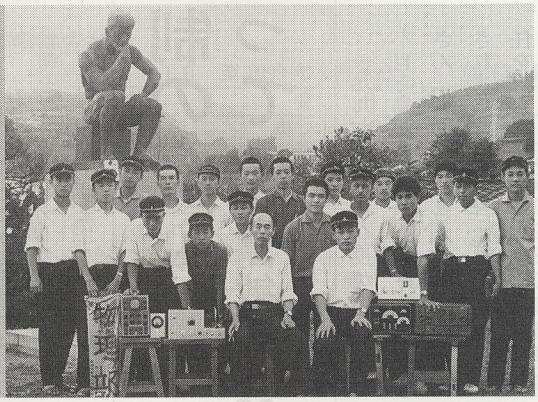
●左写真

(高校3年)インターハイ、個人戦にて長野県大会優勝、全国大会へ。2回戦で敗退。

■深志高校との親善試合

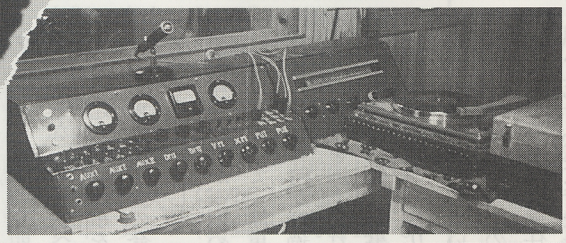


■V・O・S放送部員



山岡　秀顕●清陵祭　近所の畑からアンズ、モモ、イモ、ネギが消えてなくなる季節。もちろん昼間はまじめな顔をして、女生徒達に説明したものである。後列左から六人目。

■物理部員全員集合





藤森　正文●放送界(フジテレビ)へ進むスタート地点が清陵の放送委員会室。アンプは自前で設計・製作した。清陵祭のファイアーストームで突然の雨、アンプを救う為夢中で裸足のまま土砂降りの中へ駆け出した。

■放送室でメイン&プリアンプ製作中



生越万理子(旧姓水端)●「燃えた日」は、無かった。三年間通して肩掛カバン。スカートで登校一回。卓球部で男子が相手をしてくれたのが二回。恋もなし。下校即家業の配達。でも今は皆んなと話せて懐かしく燃えている。

＊

細川　忠光●37年秋、台風で青柳駅が土砂崩れで汽車が不通。富士見の代表で徒歩にて清陵へ。昼頃着いたが学校は休み。家に帰ったのが5時頃。ごしたかった…翌日汽車は開通したが、休んだ。

＊

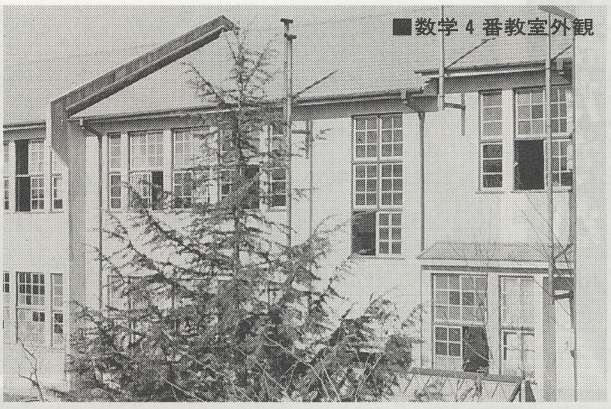
宮澤　正幸(須坂市在住)●剣道部創立！　一九六一年、先輩から沢山の剣道具を寄贈して頂き設立しました。上諏訪駅近くの道場に通って、剣一筋の修行を開始したこの年10月のスナップです。

■一九六一年剣道部誕生

熱く燃えた日々



■卒業式直前 校庭大石前で



■数学4番教室外観



五味 洋●東京がまだ遠い頃、ゼッちゃんに、行ってみたらと美術部有志で、上野の森まで展覧会と洒落込んだ田舎高校の面々。世界は広い、美術本で見るのと格段のリアリティに接し、感化されたことシキリ。



■地蔵寺にて

小松 洋●諏訪二葉の山岳部と、諏訪清陵山岳部の合同ハイキング。入笠山にて。合同ハイキングは公式には2回経験したがプライベートな合ハイも何回か見聞しています。



■二葉山岳部と合同で入笠へ



■卒業する仲間

中村 俊夫（下諏訪在住）●卒業する仲間。三人は写真によってだけ会える人に。誰が撮ってくれたのか？ かけがえのない1枚に。希望だけは心を満していたけれど、ふと将来への不安がよぎっていく青春の…

■黎明会の八ケ岳農場見学



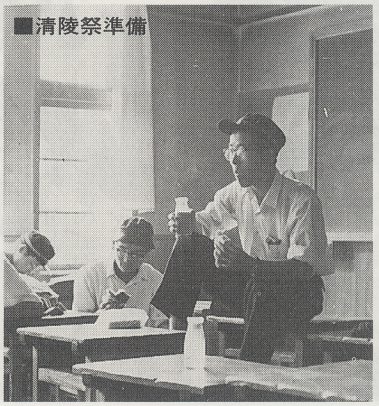
高橋 和雄●黎明会（下諏訪地方会）の活動で八ヶ岳農場見学、というのは口実で、実は二葉との合ハイ。これは昼食の炊飯中で左から高橋、赤羽仁史、伊東正光、中村俊夫の四人組。往時の面影、今いずこ。



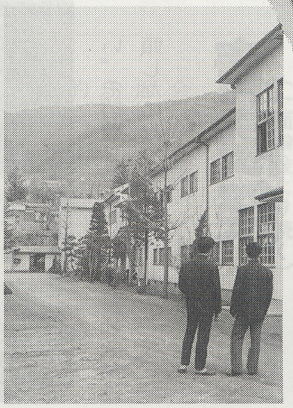
■雪の日なぜか二葉校門前



■川岸・高尾山の麓、東雲閣にてコンパ



■清陵祭準備



堀川 安久●川岸高尾神社での岡谷西部中出身者のコンパ。囲りの畑からは何の被害届もなかったと。今は諏訪東京大阪京都他に散ってますが二葉の連中と合コンやろうと言えばすぐにも集まりそう。

私たちが



■清陵祭の合唱コンクールで優勝

河合　三彦●クラス対抗の優勝はほとんど記憶にないが、清陵祭の合唱コンクールで優勝した思い出が強烈に残っている。「ブルドッグとカワズ」を一生懸命練習した。我々のクラスがまとまった記念だ。

＊

宮坂　典子（旧姓鮎沢）●37年前の清陵祭。全女生徒が合唱に参加。これで3学年分です！　歌った曲は忘れてしまい写真も少々セピア色。後列でお顔の見えない方もお元気で活躍されていることと思います。



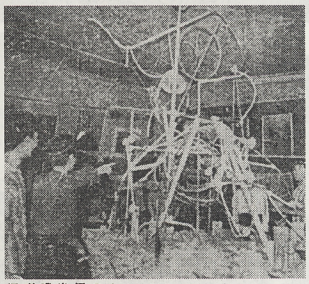
■清陵祭・全女生徒での合唱



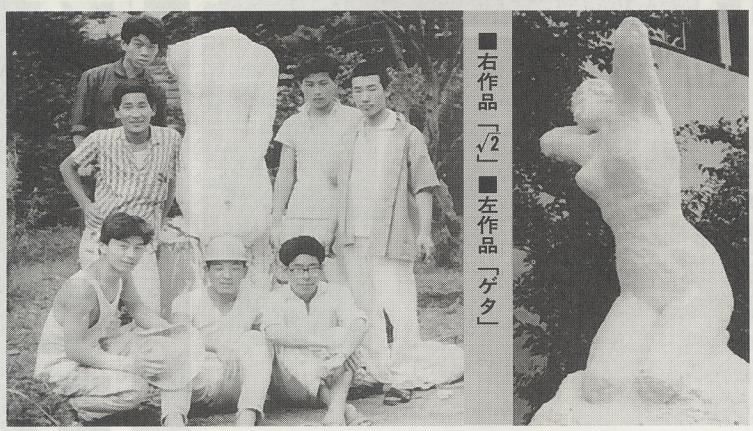
■清陵祭・英語部のメンバー

中村　厚子（旧姓横井）●昭和37年夏。清陵祭での英語部のメンバーです。確か南北戦争を通してリンカーンの生涯を英語で発表したことを憶えています。アメリカが夢を持っていた時代、語る私達も夢多き時代でした。

林　真弘（鳥取在住）●因幡の国、鳥取に来てはや27年、地元では異邦人から帰化人に格上げ中。昔清陵祭では美術部で大作狙いのオブジェづくり、今は家電メーカーで生活道具作りのデザイナー。雑事多忙中！



■清陵祭の作品ドンキホーテ



■右作品「√2」■左作品「ゲタ」

清陵祭ひらく

三日間、多彩な催し

開幕式の模様。南館前で、二日から三日間の日程でプログラムを開けた。第一日は校内祭部門。二日は一般公開で音楽、劇、放送劇、フォークダンスや作家・大庄屋二郎氏の「ヨーロッパと遠い日本人」南極観測隊員・小口・高氏（岡谷市出身）の「南極の越冬生活とその成果」と題する講演、音楽会、運動部合同の演舞等多彩の催しをくりひろげた。

御子柴　英夫（65回）●清陵祭に美術部で裸婦像を当時の正門の横に徹夜で制作し「√2」と題をつけた。この意味は「ひと夜ひと夜に人見ごろ」確か新聞にも掲載され話題になった若者達のひとりよがりで楽しかった。●小生の出身地「長地」には「硯友会」と言う地方会があって、先輩後輩が公民館に集まりカレーライス等で夜を徹して本当に様々な知識を学んだメチャクチャ楽しい思い出です。

■清陵祭役員に誘われた女生徒





宮澤　正幸●作品：「√2」一九六一年の清陵祭の門をくぐると、そこには眩いばかりの少女像があった。恥ずかしく震える手で取り組んだ青春。割り切れない気持を作品名に刻んだ。（美術部作）●作品：「ゲタ」一九六二年、清陵祭期待の美術部員作品。リヤカーで遠くの山から赤土を運び…汗して制作した少女像を囲み満足げな友と友。祭りの後の悲しさを今思い出します。

＊

高橋　和雄●昭和37年7月、三年生の清陵祭役員一同が女子清陵生を誘って湖上へ。幹事役でこの写真を撮影した端艇部員の藤森茂雄君はすでに亡い。その翌日から我々は受験勉強に没頭したのだった。

清陵祭

熱く燃えた日々



■「私の手帖」
市内行進の記録

宮坂　正昭●「私の手帖」「生徒手帳第一学年一学期用（昭35年4～7月）」より　昭和35年6月17日(金)晴
1.総会　2.英語　3.数学　4.社会　5.生物（50分授業）今日の総会で、高校生活で最も世間に反響した決議があった。つまり諏訪市内を本校生徒並びに職員の人（先生方）が樺美智子さんの死を悼む行進をやるということだった。3時に校庭に集合し15分に出発した。5本のプラカードには「樺美智子さんを悼む」「民主主義を守ろう」の類が2本、「私達に静かな場所を与えて下さい」「大人の皆さんもう一度考えて下さい」という内容で行進した。一言も発せず静かに歩いた。見ている市民の表情にいい顔はなかった。中には「がんばれよ」などと言った郵便局の人もいたが。1時間半くらいの行進だった。学校に着いて校歌を歌って解散した。帰りの汽車にはもう、静かな清陵生のデモ行進という記事の新聞を見ていた人もいた。これからの新聞にはこのことが出るだろう。良かったか悪かったかは自分では分からないが、世間の人の目にどう映ったかが問題だ。

昭和35年～38年世相史

昭和		世相年表
35年		前年より安保改定阻止闘争広がる
	7	〈ダッコちゃん〉ブーム
	10	浅沼社会党委員長刺殺される
36年	8	大阪釜ケ崎で暴動起こる
	10	大相撲〈柏鵬時代〉始まる
	11	〈アンネナプキン〉登場
37年	1	中性洗剤は有害と指摘される
	3	テレビ受信契約者1,000万人突破
	5	サリドマイド系睡眠薬出荷停止
	8	堀江謙一氏ヨットで太平洋横断
38年	3	吉展ちゃん誘拐事件起きる
	5	小さな親切運動開始
	9	地下鉄新橋駅で爆弾事件（草加次郎事件）

話題
・インスタント時代到来
インスタントラーメン(33年)
インスタントコーヒー発売
・睡眠薬遊び流行
〈ラリる〉言葉も流行し始める
・大学生の〈青田買い〉
高度成長の結果、求人難は激しさを増す
・三ちゃん農業
農家の長男までが農家を捨て他産業に就職
・みゆき族
銀座みゆき通りにばかでかい紙袋を持つIVYルック族登場

本
・どくとるマンボウ航海記（北杜夫）
・雁の寺（水上勉）
・砂の器（松本清張）
・何でも見てやろう（小田実）
・竜馬がゆく（司馬遼太郎）
・徳川家康（山岡荘八）
・楡家の人びと（北杜夫）
・江分利満氏の優雅な生活（山口瞳）
・地の群れ（井上光晴）
・愛と死をみつめて（河野実・大島みち子）

歌
・潮来笠
・誰よりも君を愛す
・有難や節
・上を向いて歩こう
・スーダラ節
・北上夜曲
・可愛いベイビー
・王将
・赤いハンカチ
・いつでも夢を
・山男の歌
・こんにちは赤ちゃん
・高校三年生
・見上げてごらん夜の星を

値段

白米	975円	映画	230円
そば	40円		260円
タクシー	80円		100円

深志交歓会



■深志交歓会

宮澤　正幸●深志高校交歓会！再建早々の剣道部が、真新しい部旗を掲げて誇らしげに深志高校剣道部を迎えました。訪れた友と迎えた友とが共に感激した上諏訪駅前公園での記念撮影です。



■上諏訪駅前までお出迎え



■深志交歓会・守矢先生と

堀川　安久●深志高校との交歓会。臨時列車で上諏訪駅に着いた仲間を迎えたバレー班。あの時覚えた深志の校歌を36年経っても忘れていない。

降幡　賢一●対深志交歓会。文学部の旗手を務める小生は詩人希望。同人誌作りに没頭していた。小遣いをはたいてガリ切りしたが、ほとんどただで配って財政破綻。あえなく3巻で廃刊になった。



■上諏訪駅前（文学部）



■のぼりでお出迎え

私たちが

清陵諏訪湖マラソン

諏訪清陵高校の諏訪湖一周マラソン(二十一キロ)は二十一日行なわれた。①原雅(二年)1時間22分14秒②小松洋(二年)1・22・22③小林敏(二年)1・25・16④丸山剛(二年)1・25・38⑤小池悟司(一年)1・26・05⑥佐々木朗(一年)⑦関谷高彦(一年)⑧角宏弘(二年)⑨木川英弘(二年)⑩長谷川貴弘(二年)



■諏訪湖一周駅伝・ムシロ旗は重かった

小松　洋●清陵の思い出は、山岳部と、マラソンと、勉強である。山の思い出は原色である。それは冬山であっても例外ではなかった。●このマラソンはきつかった。死ぬかと思ったほどである。1年で2位、2年で6位、3年で9位だったか？　3年間10位以内入賞を果たしたので、学友会から賞状をもらいました。

宮澤　正幸●諏訪湖一周駅伝大会！一九六一年5月2日、2年7部の出陣前のスナップです。ムシロ旗を自転車に縛り付け大声をかけて伴走する友に感謝しつつ走った青春が熱く胸を締め付けます。●スケート大会！一九六三年1月25日、諏訪湖でのスケート大会。入試間近、アルバムには3年7部は4位、滑り納めとメモがあった。かつては諏訪湖はスケート場だったのです。



■諏訪湖でスケート大会



■二葉スケート部と白樺湖で合宿



■端艇大会優勝



■二葉校庭でのバレーボール新人戦

米窪　修明●岡谷北部中卒の「親友会」は結束が堅かった。お酒、たばこ一切なく寮歌から無形文化財まで、夜を徹した合唱が忘れられない。写真は二葉メッチェンと岡谷市民ソフトボール大会に出場。●二葉校庭でのバレーボール新人戦。彼女たちの応援をもらったが、強敵穂高にたたきのめされた。登山帽をかぶったり、手拭いを頭に巻いたり。酸っぱいような臭いのする部室が思い出深い。

＊

松澤　達雄●2年生の春、ルーム長を押しつけられました。二葉の運動会を楽しむ連中を拝み倒して端艇大会の練習をしてもらい、駅伝大会ではムシロ旗をかつがされ…懐かしい思い出をもらいました。



■二葉メッチェンとソフトボール大会



■清陵祭で手に汗にぎるフォークダンス

小野里　多加司（旧姓　牛山喬史）●誰が決めたか上諏訪駅から道路の右側は清陵、左側は二葉と離れ離れに登下校の暗黙のルール（今は残ってはいまい）。その垣根が壊れるのが文化祭、やれプラトニックだの、女なんかとかいってはみたもののフォークダンスで手を握りあう、嬉しさ・恥ずかしさが何ともなつかしいこの頃であります。●二葉のスケート部と一緒に白樺湖でバンガローに泊まり込んでの楽しかった合宿。朝、布団一面に霜が降りて真っ白になっていた事を今でも思い出します。寒かったとか辛かったことなど、どんなに思い出そうとしても不思議にありませんねー。

＊

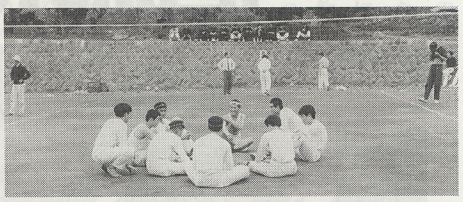
熱く燃えた日々

村山 武海（旧姓 山田）●心理研究会設立の背景

心理研は昭和35年頃に、当時1年3部の同級生であった岩下貞保君（現・中学校校長）、上原秀樹君（現・病院長）と私（現・民間企業の研究所長）の3人が中心になって設立した。いかにも不思議な組み合わせであるが、それには若き日の甘酸っぱい思いがあった。当時交歓会をしていた松本深志に心理研があり、そこにSさんと言う素晴らしい美人がおり、清陵にも同部を作ろうと言うことだったように思う。密かに、次の交歓会で、心理研として



■クラスマッチ作戦休み

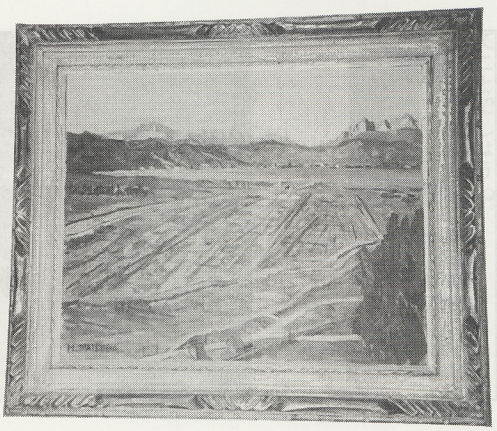


Sさんと再会することを期待していたのに違いない。3人とも澄まして良き社会人を演じているが、若き日には、なんとも幼稚なことを考えていたものである。

松田 洋●当時下宿していた四賀・



■奈良・京都修学旅行の車中



■普門寺から北アルプスを望む

普門寺の山の上から湖水や塩嶺そして遠く北アルプスを眺め描いたもの。冷たい体育館に座り安保など激しい議論をし、ようやく世の中を井戸の底から見る思いがした。

丸茂 雅弘●昭和37年頃試胆会の老舗名門は我永明学友団でした。小生清陵時代、恩師に友に学ぶ事ばかりでしたが、試胆会老舗の手法をライバル宮川攻学会に伝授したのが、唯一の誇り高き思い出です。

＊

藤原 剛●自主・自治に名を借りた自由奔放な生活と気質は今も尾を引いている。当時の多くが今も鮮明に脳裏に焼き付いているが、残念ながら写真は見つけられなかった。当時は写真を撮る、撮られることがなかったようだ。企業の歯車で30年。反骨・天の邪鬼は困ったことに今も息づいている。

「女性の集い」雑感

生越万理子（旧姓水端）66回

東京清陵会に女性の出席が少なく、三十回近く出席している私は、女性の出席を促して欲しいと言うご要望に極力面識のある方や自分が出来る範囲の連絡を取って来たのですが、思う様にゆかず「又、おめさんだけかえ」等と言われ落胆しておりました。

そこで小平前会長に御相談の上「女性の集い」を発足させ、現寺島会長にもお力添えを賜り、第四回目が永田町「せいりょう」で催される迄になりました。第三回迄は、渕上さん、西村さん、私が手探りで催して参りましたが、四回目からは、六九回の轟さん、小沢さん、九四回の和田さんに幹事をお願いして、御来賓の方々を含め三十二名と盛大に催されました。四回目ともなると「何かテーマを決めての懇親会を」「講師を招いて聴講を」という意見も出て来ましたが、その都度初対面の方が多く、各々の自己紹介、近況を伺うだけで時間も一杯になってしまいます。

懇親会の内容をほんの少し御紹介します。幼稚園の園長さん「これからの少子化の問題。女の子がしゃがみ込んで屯しているのが腹が立つ」他に「団地の自治会活動」の話、教職に携わっている方は「子供達の生活感の変化、その母親達の様変り」「これからの高齢化社会に自分自身の老い方にどう向っていくかを考えて行きたい」。清陵時代の話では、「男子生徒がゾロゾロ付いて来たのに大学に入ったら誰も付いて来なくて淋しかった」「女子トイレが無く交代で見張り乍ら行った」「質実剛健な男の砦に入学して、その日に何とも目障りな人種が来たなという男子生徒の眼を感じた」等々、盛り沢山でした。

女性第一回の卒業生から九九回生の現役学生迄個性的な生き方をされ、仕事を持つ女性が七割以上です。主婦となり、夫を支える方も筋が通っている様です。強いてお叱り覚悟で難を探せば、少し「はんなりした部分が少ないかナ、漫才で言ったらボケとツッコミのツッコミ型かナ」と。

私も五十年以上も生きて「雖千萬人吾往矣」の御旗を掲げて歩くと、あっちの角にぶつかり、こっちの人にぶつかり、言いたい事を言えば、自分自身はすっきり爽やかな気分なのだが、気が付いてみると囲りに友達がいなかったり相手が疲れたりしています。たまには「おたっこないこと」の一つも言った方が相手に逃げ道を作ってあげられるのかもしれません。

さて、待望の第五回の幹事は、七十回の方々で、率先して引き受けて下さいました。爽やかに速断即決でした。若い年次の方に引き継いで裾広がりの大きな輪に広げ、何らかの形として残し、親睦を深めたいと願っています。

今回「女性の集い」の名称を、変えようと言う事で、ネーミングを募集しております。皆様、是非ご応募下さい。大地にしっかり足を踏ん張って、背筋をピンと張って堂々と歩いている、「諏訪清陵高校、〝女性の集い〟万歳！」



私たちが

特集2

宮川・攻学会 文化人鼎談

信濃にしるき三峰頭

司会●お忙しいところをありがとうございます。タイトルを「信濃にしるき三峰頭」としたのは、校歌第一番の「信濃のしるき秀麗の」というのと、第二校歌の十番「芙蓉峰頭一点の理想の花の咲かむまで」いうところから採りまして、お三人、茅野市宮川出身の峰頭ということで、この題をつけさせていただきました。東京の清陵会ですけれど、今回我々六六回生が幹事で、司会を仰せつけられた私が宮川出身ということで、宮川中学、攻学会の出身で、それぞれの道で活躍されていらっしゃるお三方にお集まりいただいて、「私たちが熱く燃えた日々」を語っていただきたい、と企画したわけです。どうぞ、気楽にお話しいただきたい、と思います。

中学を卒業して、清陵に入って、そこでいろんな形で感化されたものがあって、今の職業についておられるところがあるんじゃないかと思いますが、僕の場合で言いますと、僕は担任が数学の守矢日出男先生。あの先生は数学の大家なんですよね。授業を始めると、黒板にノートも教科書も持たずに、端からね、あれ黒板二枚つづきだったですよね。頭からケツまでね、何も見ないで数式をワーッと解いていくんですよね。ワッこんな先生がいるんだ、アッこれ僕、数学は駄目だって諦めてしまった。で、美術クラブに入って、ゼッちゃん、宮下琢郎先生と出会った。そのゼッちゃんがまた絵がうまかった。木炭で紙にアグリッパーとか、ヨーロッパの石膏像をものすごくきれいに描くんですよね。で、僕はそっちの方に感化されて、美大に入った。グラフィックデザイナーになって、今まで続いているわけなんですね。現在、広告代理店で、SP、つまりセールス・プロモーションをやってます。SPって、セキュリティーポリスとしょっちゅう間違えられるんですけどね、販売促進、物を売るための販売支援策、そういうものを職としております。



まあそんなふうなことで、僕は守矢先生の数学は駄目だ、ということだった訳だけど、宮下先生に、なんかどっかの細胞が触発されたんでしょうね。ビビビビッと来て、こっちの方に進もうとした。やはり清陵での高校時代が、私にそういう道を選ばせたんですが、そのようなエピソードを、お一人お一人、語っていただければ、と思いますが、まず小飼さんから。

＊

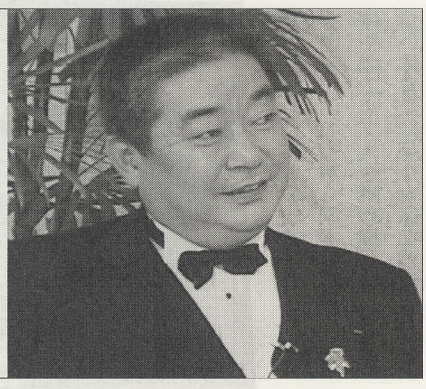
小飼●私、卒業したのは昭和三十九年の三月ですが、家が寒天製造やっていましてね。五人兄弟の末だったんですが、兄二人は東京の学校に来て、姉もこっちに来てみんな帰って来ない。親父が怒って、で、私、跡取りになった訳ですね。もともと勉強があんまり好きじゃないってことがあって、甘んじてそれを受けて、とりあえず家に入ったんです。冬は製造して夏は販売するらしいんですが、結局一回も製品を作らずにやめたわけですよ。その冬までもたないでおん出てしまった。それからまあ転々と遊んでて、あるきっかけでですね、一九六九年にマキシム・ド・パリ株式会社に入社したんです。

司会●銀座にありますね。

小飼●その頃、二十四歳。ここがもうとにかく日本で一番で、すごいところであると。自分も何かやらなきゃいけない。で、結局僕はワインをやってみたいな、と思ったんですね。それより前、横浜で遊んでいる時に、ちょっとワインを一口、口にしました。今考えてみると、ま、一本、そうですね、レストランで飲んで五千円ぐらいかかるワインで、貴腐ワインっていう甘いワイン。これを飲んだんですよ。なんて美味しいんだろうと思った。で、マキシムという店に入るきっかけが出来て、何カ月かして、ソムリエの仕事に入った。すると、フランス人もいつもいるし、ミュージシャンもいろんな国の人がいました。この仕事でちょっとやってみようかな、素晴らしい仕事じゃないかということで。

で、八一年に全国ソムリエ最高技術賞コンクールで優勝することができた。八二年に今いるプリンスホテルに入社したんですが、その後はいろんな賞を受け、例えば大きなものは九二年にフランス政府からフランス農事勲章シュヴァリエ章というのを受けました。九五年に世界最優秀ソムリエコンクー





小飼一至（三雄）氏
67回
新高輪プリンスホテル
副支配人
日本ソムリエ協会副会長
国内ソムリエの先駆者で
東洋初の称号者

熱く燃えた日々



ル審査委員長に就任し、九七年には、国際アカデミー賞（日本文化振興会）という、ソムリエとして一番誇れると言うか、思い出深いと言うか、これからも残ると言うか、賞をいただきました。九五年には、世界ソムリエコンクールを日本に初めて招致出来ました。

コンパの時。

小飼●弱かったけどね。

藤森●で、その時にね、これを飲んでみろ、おもしろい飲物だ、お前ら飲んだことないだろうって、飲ましてくれたのがコカ・コーラだった。

小飼●あ、僕ね、コカ・コーラ初めて飲んだのは、兄が飲ましてくれたんですよ。よく川に手で魚とりに行ったでしょう。そこで、ま、買って飲んだんで。なんておもしろい味だろうっていう。味にはやっぱりかなり興味あったんですね。

藤森●俺は飲んだことなかったんだよ。清陵入った時に三雄さんが飲ましてくれて、その時、おそらく俺の周りのやつ初めてだったと思う。みんな珍しそうだった。ニュースとしては知っていた。コカ・コーラというアメリカから来たものがあるっていうのが。だけど飲んだことなくて。

小飼●たぶん、あれ、（店が）新井に近いから買ってきたんだね。

藤森●一本だけだったです。少しずつ茶碗でね。だけど有名な割にね、これがそうかと思ったよ、なんか変な匂いがしたよね。すごい人工的で嫌だった。

小飼●僕、あれ飲んだ時に、初めて飲むと、たばこでもなんでも、たばこだってむせるし美味しくないじゃないですか。コーヒーだって初めて飲んだら、うまいとは言わない。だけど、あれ飲んだ時は、うまいと思ったんですよ。兄が東京に出ていたから、中学三年のときかな。

藤森●だから、あれ以来駄目でね、今でもほとんど飲まない。

司会●やっぱ、コンパがそうさせたんですね、じゃあね。（笑）そう言えば、僕らが一年に入った時は、福田屋ってご存じですか、あすこの裏に青年会が集まるような倉庫みたいなところがあってね、そこで変な味のカレーとかですね、トリスのウイスキー、飲まされたんですよね。新入生だったんで、飲めーッという感じで、お酒とウイスキーを。本来はいけないんですよ。（笑）清陵入ってから、攻学会の試胆会をやるぞと言うときに。そんな思い出ありますけどね。

守矢●あのころ、小飼さんは、坊ちゃんでね。有名な坊ちゃん。一人だけ、坊ちゃん刈りだったんですよ。

司会●そう、かっこよかった、とにかく。あのころ、まだ郷ひろみはいなかったけど、思えば、郷ひろみっぽくてね、女性にもてたんですよ。

藤森●下級生だったからミッちゃんすごい不良っぽくて恐かったよ（笑）。なんか知らんけどね。下級生から見ると、先輩って恐いんだよ。

司会●ああそうでした。

守矢●それが結構魅力的っていうところ、あったかもしれない。

小飼●それほどの不良じゃなかったんですけどね。

藤森●清陵の不良文化みたいなのって、宮川にはないんだよ。やっぱ下諏訪とか上諏訪とか、ああいう宿場町、城下町で、宮川のような、純粋農村地帯では不良文化はなかった。

司会●純粋って言うかね、ど田舎ってことでしょうね。

藤森●ミッちゃんはその中でちょっと珍しかった。

司会●染まる場所がないってことなんでしょうね。だから不良と言えども、かわいい不良だったんでしょうね、きっとね。今から考えると。

守矢●ほら、喫茶店入っちゃいけない時代だったでしょう。それがね、喫茶店に入った人だって。（笑）

小飼●いや、働いてたから、もう三年の時は。ちょっとアルバイトをしたり。上諏訪で。

司会●ああそうだったんですか。

守矢●それであの、そういう私なんか入ったことないわって思ってたから、（笑）いいなあってちょっと思ってましたけどね。

藤森●そうそう、喫茶店は高校じゃいけなかったような気がする。

守矢●でもね、私、（旧姓細川）蘭子さんとね、一回入ったことがあるような気がする。

司会●いや、僕もね、隠れて入ってましたよ。帰りにちょっとギョウザを食べるとかもね。

守矢●映画も見たいなって二人で。試験が終わったって言って。



小飼●バーへ行くの覚えてね。高校三年ぐらいの時に。バー。あったじゃない。茅野に。

司会●ああ、茅野駅の裏の。

小飼●で、カバン持ったままね、行くんですよ。そんなに飲めないのに。トリスバーみたいなところ。

司会●ありましたね。新星という映画館があるでしょう。あの辺の近辺がそうなんですよ。

小飼●よく行きましたよ。

司会●エイトとか言うね。キャバレーがあるんですよ。ほんの一角しかないけど。

藤森●そうそう、ほんの一角だけ新宿が来たみたいなところがあった。

司会●僕らはあすこが憧れで、行きたいなと思ってた。じゃ小飼さんはあすこに入ってたんですね。

藤森●やっぱり田舎とはいえね、結構、ちょっとはあったですよ。そういう都会の文化が。

＊

司会●じゃあ次に守矢早苗さん。諏訪大社の祭政体ミシャグチ神の神長官第七十八代目でしたっけ。

守矢●そうですね。

藤森●諏訪大社の神様より前から諏訪を支配しておられた。世が世なら神様ですよね。（笑）

小飼●大変ですよ。

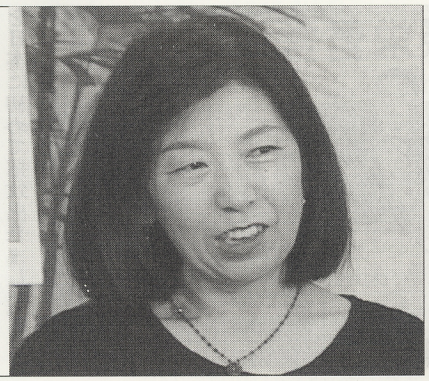
藤森●正確には神様の声を聞く人。

守矢●というのを聞いたのは祖父が亡くなって、私に次の代を、って言ったんだと、母から聞いたのが、ま、私の始めのね、そういう役割であると。

私たちが



守矢早苗氏
67回
東京・江戸川区立鎌田小学校校長
諏訪の先住洩矢神の子孫で、ミシャグチ神の祭祀権筆頭神長官第78代



司会●それはいくつ位の時ですか。

守矢●大学ですよね。

藤森●あんまりそういう意識はなかったの？

守矢●ないですね。まったくなくって。その祖父から、じゃあ何かを継ぐとかっていうことを、生前に聞いたことがなかったものですから、全く自由奔放と言うか、本当に自然の中で育ちましたから。母はもう一心不乱に働かないと駄目な時代でしたし、授業参観も来てもらった覚えもないです。しかし先生というものは、ものすごい存在なので、大事にしろということだけはずっとね、なんかこう教えられてきたような気がするんですよね。

司会●お母さんにですか。

守矢●はい。母にですね。母は木曽の出身ですが、木曽に母の十歳離れた姉がいまして、その人が先生で、それから母のお父さんも先生をやった、ということで、非常にこう、なんて言うか、礼儀正しい。その伯母、母の姉の姿、立ち居振る舞いと、そういうものがすてきだな、というのが何となくあったんですね。

で、高校の話になりますけど、高校に入るのも果たして誰がそれを決めたのかと言いますと、母から言われたことでもなかったようなんです。だから多分自分で清陵に行こうと決めたみたいなんですよ。

藤森●普通はだいたい（女性は）二葉に行ってた。一般的にはね。

守矢●で、なんか私の物差しには、女子校に行こうとか男子校に行こうとかっていう気持ちは何にもなくって、ごくまあ自然に村の人たちが行くような学校に行けばいいじゃないかっていうことだったかなっていう。で、行ってみたら同じクラスに（女子が）二人しかいなくて、とんでもない女子が少ないところだ、っていうことになりました。学年全体で十一人。蘭子さんなんかクラスで一人だったんですよね。それでお昼になると用務員室みたいな警備員室みたいなところにザーッと集まってきてですね、それで立って、なにかパン食べるとかっていうような雰囲気で。

で、女性は体育だとかそういうことはほとんど埒外でしたから、自分勝手にテニスをやったり卓球をやったらいいんじゃないかと。

藤森●女子は体育、一緒にやってなかったね。みんな女子だけどこかでテニスやってたよ。男子は危ないからね。けだものみたいな。（笑）

司会●バンカラ連中の集まりですから。



守矢●それで、担任の先生は峯村（秀夫）先生だったんですね。日本史の先生。でも、どういうわけかウシマサ（牛山正雄）先生の地研の教室に入り浸ったりしてですね。そこに入り浸っていると、いろんな人が来るんですね。照信さんもそうですが、上の人たちもたくさん出たり入ったりして。



67回生の女生徒，修学旅行にて

小飼●研究室？

守矢●地学研究室って言ってなかった？

藤森●教室の横にあったのよね。大体先生の。

守矢●あの準備室みたいなのあったでしょう。狭い。うなぎの寝床みたいな。で、体育研究室なんかでは、ギンナンが落ちてると、拾ってきては、オイ食え、なんて言って、その火鉢でですね、パチンパチン焼いたのをいただいたり。

それから教えで覚えているのは女性の先生、浜多津先生、国語の先生でね。大変こう鋭い方だなっていうのだとか。あまり成績もよくなかったものですけれど。そういう周辺のことはよく覚えていて、談論会って言うの。

司会●はい。談論会ありましたね。

守矢●ありましたね。あの、大勢が本当に膝抱えてみんなで講堂に集まってですね。

司会●床にそのまま座っているんですよね。

守矢●先輩たちのこう、談論風発の意見交換を見て、なんと言うんでしょうね。ジーッと、自分が加わるわけでもないんですけれども、聞いていて、そういう自由な気風っていうのが染み込んだような時期だったかなという気がしています。制服もないし、結構自治の学校で、いろんな身近なことは自分たちで決めていくような学校だったと思うんですよ。

司会●そうですね。先生方はあまりいろんなこと言わなかったですよね。

守矢●干渉ってこと、まさにしないですよね。ムシロ旗立ててクラスの写真撮ったりですね、ワーワー言いながら、結構それでまとまっていて。この間ある人がですね、清陵って変なところで卒業アルバムってないよね、って言ったんです。その人は、卒業アルバムぐらいあったらいいじゃないか、と思っていたみたいですけど、私はでもそれが清陵の清陵たる所以だと思う。私、それいいなって思ってるんだ、という話をしたんですけど。

私は卒業してから横浜市立大学に行きまして、そこも割合自由な学校でしたが、自分が何か持っているものを表現する表現力というのがないと駄目だなって言うのをすごく感じたんです。で、就職してから、そういうことにふと気がついてですね、子どもに教えるのに、自分が自己表現ができなくてどうするんだっていうのがあって、少しお話ができる人間になりましたけれど。卒業した後もやっぱり、高校の時の談論会の印象だとか、それから文化祭で夜中まで残ってみんなで自分たちのものを作り上げる、本当にすごいエネルギーを燃やしてたっていうのはすごくて、たぶんそういうのが今、どこかに染み込んでいるっていう気がしています。

司会●クラブは何クラブでした？

守矢●クラブはですね、英語クラブ

熱く燃えた日々

っていうか、ESSって言ってましたね。それで遅くまで「アリババと四十人の盗賊」みたいなもの英語劇でやったりというのがありましたですね。

司会●ということは、体育館で発表したんですか。ステージの上で。

守矢●練習をした覚えがありますからね。恥ずかしながらやったのかな、と思って。もう全然覚えてませんね、その英語は。(笑)

あの絵の印象もありますよ。宮下先生に教えていただくんだけど、本当に柿の赤が出なくてですね、とても苦労した覚えだとか。

司会●あ、その赤の色。少しオレンジがかったオペラっぽい色が出ない、という。

守矢●あの赤を出したいと思いながら、あの赤が出ないな、という。すると、おめえは構えるから駄目だわエー、っていう、そういう言い方で、宮下先生に言われたような。

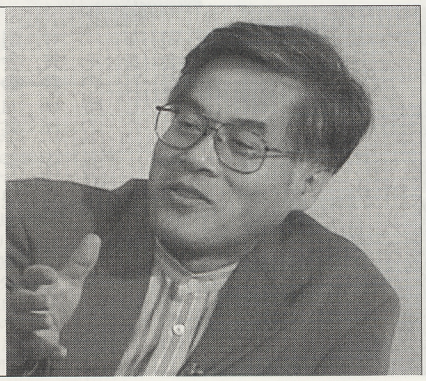
司会●そうですね、宮下先生は、自然体だったんですよね。

守矢●あの、清陵の何だっけ、五十番まで(成績が)出てた、あれ嫌でしたね、私は。

司会●僕も嫌。嫌というより、関係なかったですね。(笑)

守矢●あれの下を、こうやって下向いて歩きましたね。

小飼●あれ、載らなかった？　載ったときの方が多いでしょう。



藤森照信氏
68回
東京大学教授
建物から人と時代の思想を引き出す建築進化論者
「建築探偵」「路上観察学」でも知られる

守矢●いやあ、難しかった。照信ちゃんはきっとその辺にいたんじゃないですか。

藤森●いやいや。

＊

司会●じゃあ、そろそろ、今度は藤森さん。

藤森●さっき早苗さんが言ってたんで思い出した。確かに清陵ってね、その時は思わなかったけど、目茶苦茶自主的な、生徒の自主性のあるところだった、大学と近いですよ。それと先生を先生ゆえに尊敬しなくていいっていうのあったね。立派な先生は尊敬するけど、立派でない先生は一向尊敬しなくていい。すごくそういう自由な。

司会●そんなことありました？

藤森●それはすごくあったよ。よく先生をいじめた記憶あるもの。後で思うけどね、ああいう学校はなかっただろうと。僕の教わった先生は市川(嘉章)先生って言ってね。途中でやめて信州大学の英語の先生になっちゃったんだけど、市川先生がふと漏らしたことがある。この学校は昔の旧制高校みたいな感じがすると。おそらくそういう感じだったんだと思う。で、君たちをちゃんと指導しようと最初は思ったけど、指導してもしょうがない人たちだと思って、勝手にさせとくのが一番いいと思った、ということをおっしゃっていた。その影響ってすごくあるね。僕は東北大学入ったんだけど、ものすごくレベルが低いと思った。

司会●東北大学がですか。

藤森●うん、自主性という意味とかね。それからあと、偉い先生であろうと、内容がなければ尊敬しない。偉いかどうかは、内容だけで決めるっていう、ああいう自由自主というかね。あれはね、やっぱし骨身に沁みているね。それで、だから逆に、社会との不適合が起こる。日本の社会、そうなっていないわけだからね。それは清陵のよさであるし、ある種の不幸でもあるんですよね。すごく理想的だったでしょう。そういう夢見心地の人たちが多いところだった。

司会●そう、こうしろああしろは全くなかったですからね。

守矢●なんにもなかったですよ。

小飼●それで結構好きなことやっていた。

藤森●自分の職業で言うとね、割合、子どもの時からそういうこと好きだったからね、建築の道を選ぶことについては、清陵は関係ない。

司会●ああそうですか。いや、僕は諏訪大社の建物が素晴らしいじゃないですか。ああいう関係かと思ったの。

藤森●それはむしろ大人になってからですよ。諏訪って場所が異様な場所だったりとかね。だって、大学で教わってびっくりしたもの。御柱っていうのがあって、それは本殿を持たない神社っていうのは日本にそんなにない。三輪大社、諏訪大社。非常に古い形であると。それで御柱っていう行事があるって、大学の建築の歴史の授業で教わったからね。それでむしろ、おおそうか、っていう。

司会●ああ、そうなんですか。

藤森●だから自分が経験してきたものが、きわめてある特殊なものであるというのはね、大学で。

司会●じゃあ、東北大学の建築科に進んだのはどういうことからですか。

藤森●子どもの時から割と好きだった、物を作るのが。自分ちの母親の方が大工さんの棟梁だったっていう。それであと家をね、小学校二年の時に、村で初めて茅葺きの家を壊したんですよ。で、見ていた。だから僕は建築に進んだんですよね。

司会●その、藤森先生がね、建築探偵団という本をいろいろ出していますよね。赤瀬川原平さんと。その中で関東地区はよくやっていますが、諏訪地区で、そういう意味での顕著なものっていうのは何かありますか。

藤森●諏訪って、なんてったって、神社が一番いいんじゃないかな。

司会●神社になっちゃいますか。

藤森●神社とね、あまり知られていないけど、渡辺家っていうの。諏訪藩の藩士ですが、岡谷なんです、出は。一応維新の志士なんですが、その渡辺邸っていうのが蓼科に移してある。明治の末の物で、日本のトップクラスの洋館です。

あとはね、諏訪で大切な建物と言うとね、山浦の民家ですよ。あの辺のずうっと、他の地方の民家とだいぶ違うとこ。校倉っていうね、昔のやつをあすこでずっとやっている。それと日本で最後まで木の皮葺の家が残っていたのが山浦なんだ。白樺葺とかね。そういうもの、最近になってようやく興味を持っています。ああ大事なものいっぱいあったんだって。

司会●もう一個、片倉館ってあるじゃないですか。あの建物はどうなんですか。

藤森●いわゆるヨーロッパ風のね、

建築探偵手帖



私たちが熱く燃えた日々

あれ作ったのは、二代目片倉兼太郎さんっていう人でね、片倉家の。あの人がね昭和の初期に、世界漫遊をするんですよ。で、ドイツに行った時、バーデンバーデンっていう有名なヨーロッパ一の温泉地があるの。そこを見て、そういうものを諏訪に作ろうと思って、それで帰ってきて、森山松之介っていう建築家にやらした。昔は地下にスチームバスなんてあったんです、今はないけど。当時の温泉としては唯一洋風のものですよ。温泉て言うか、大衆浴場。

司会●いや、あの頃はかなり洋風な建物で、なんかちょっとあすこだけ後光がさしていたような、ね。

守矢●片倉製糸と関係、もちろんあるんでしょう。

藤森●もちろん。片倉製糸の社長ですよ。片倉が富を地域に。まあそれ、女工哀史の問題なんかもあったりしたから、地域に還元しなきゃと言って、美術館と公園と、今で言えばクアハウスと言うかね、温泉を作ったんです。あれも素晴らしいです。

司会●すると諏訪清陵のボロ校舎は、その建築の観点からいうと。

藤森●いや。あれは調べて分かった。一応ね、戦前の中学の建て替えがあったの。まずね、深志。次に二葉をやった。で、そこでお金が尽きて、それで清陵はもう木造になっちゃったの。もう戦争に相当近い時期ですよ。

司会●ああ、二葉は少し洋館風っぽいものね。

藤森●そうそう、松本で深志やるでしょう。で、次に女学校をやんなきゃ、というんだが、結構偉いのは、長野市をあんまりやらないのは県庁があるから。つまり自分の足元を先にやっちゃいかんと、北信と南信のバランスを取った。そこでお金がもう駄目で。

司会●それで僕らが行ったころ、清陵は。

藤森●ひどかったでしょう。モルタル塗りで。

司会●いわゆる校門がないんですよね。なんか変なところから入っていったんですよね。

藤森●そうそう。それとあと、建築はひどかったよね。

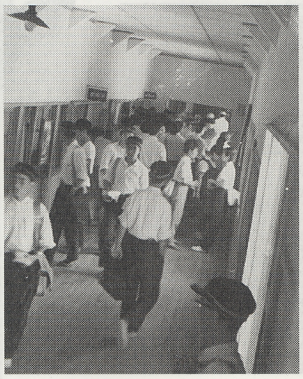
守矢●（床が）ウグイス張りでしたよ。

藤森●そうそう。

司会●油臭くてね。

守矢●私ね、写真持ってきたんですよ。その時の。清陵銀座っていうね、廊下を写した。

司会●あの、それは職員室の前のことですか。



守矢●ええ、その辺のことで。（笑）あのホラ、教室をとにかく移動しますよね。移動する時にみんなすれ違うわけですよ。

藤森●ああ、そうか、授業ごとに全部別だったからね。教室がね。

司会●クラスはクラスでね。授業は授業っていうのあったんですよね。

守矢●で、女性でも私なんか布のズックのカバンだったわけで、おしりにバタンバタン来る。あれでね、廊下で私とアッちゃん（旧姓　土橋敦子さん）が話ししているとこ、誰かが撮ったわけですよね。

＊

司会●じゃあ最後に、お仕事の関係で、これからの抱負、希望を御披露していただきたいと思います。

藤森●僕は旧高部村で育って、それから高校まで、田舎で過ごしたが今から考えると、何か信じられないような昔式の暮しだった。ところで一気に高度成長でね、僕らが大人に、高校時代ぐらいから大きく日本は変わってくでしょう。

司会●そうですね。

藤森●俺たち子どもの頃はね、ほとんど江戸時代とあんまり変わってない。車なんてなかったし、田植えだって全部手でやったでしょう。耕耘機はない、バスはない。自転車もあんまりなかったですよ、一般には。だから電灯とガラス以外にないのよ、近代が。するとあとみんな江戸時代なのね。学校制度はあって、町へ行けば鉄道は通っていたけどさ。田圃とか農業全部、牛馬人力でしょう。そうするとね、僕らは、江戸時代と現代を生きちゃっているんだよ。俺たちが味わったことを、ちゃんと記録しておかなくちゃいけない。子どもの時から何食べたとか。どういうこと感じながら生きていたとかね。どういう生活があったとか。あれはもう絶対戻らない。それを具体的に、克明に記録するということはすごく大事なことで、僕はこれからやりたいなと思ってます。

司会●じゃあ守矢さんは。

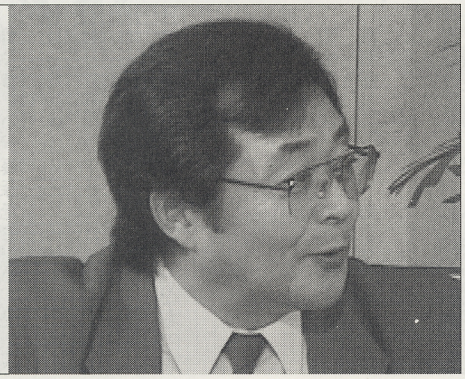
守矢●はい。共通しているところがあるのかもしれないんですが、私は一九四五年四月生まれなんです。つまり敗戦の年。終戦の年なんですよ。それからもうすぐ二一世紀ということで、私はたまたま子どもたちの教育に携わったので、思うことは、本当に自分が経てきた時代とね、全く違う時代を子どもたちは生きていると。このように失われる物が多いのかなっていうのをすごく感じましてね。今、だから自分の役割というものを、もう少しで定年退職というようなこともチラチラ思うものですから、じゃあ自分は一体何をその先はするのかと。まあ今は目の前にある子どもたちと取っ組み合いをしながら、教育を考えるんだけれども、じゃあ、どのように自分を生きていきたいかっていうことになると、やっぱり譲られてきたものをもう一度自分で何であるかをはっきりしたいな、というのがありまして。今、家に残っているものって古文書ぐらいなんで、まあ古文書を少し読めるようにして、そして今まで祖先がね、何を求めて、そしてどんな役割を果たしてきたか、というのを問い続けることが、まあこれからの自分の仕事かなというのがあります。

司会●では最後に小飼さん。

小飼●はい。特に大きな希望とかそういうものはもともと持たない男でしたから、とくにありません。ワインっていうものを三十年間ぐらい扱って、というか、付き合ってきたわけですが、まあ一番自分に尽くしてくれたのが、やっぱりワインですよね。だからこれからも、もっともっとワインが飲まれるように、何かそういった活動をしていきたい。ワインに恩返しをしていきたい、っていうふうに思っています。

司会●どうも長時間、ありがとうございました。





司会・五味洋
66回
グラフィックデザイナー
広告代理店「アド・メルコ」勤務　SP局長
クライアントの販売促進業務に携わる

追悼　尾澤賢一君

小口禎三(36回)



■ありし日の尾澤氏，箱根にて

平成十年十二月十二日の夜、尾澤賢一君（三七回）の美和子夫人からの電話で賢一君の死を知る。たとえわずかでも後輩の死を聞くのはたまらないものだ。ましてや永年苦楽を共にしてきた親友である。

彼は東大を出て日本勧業銀行（現在の第一勧業銀行）に入行、福岡支店長等を経て、本店の初代宝くじ部長となる。やがてユニオンクレジット会社の創設に参加、専務取締役として活躍、今のUCカードのテントウ虫のシンボルマークは、アイデアマンの尾澤君の創案である。銀行での彼の働き振りについては知る由もないが、宝くじ部長の職はマルチ人間の彼には誠に適任で、宝くじ音頭というのを作ってテレビコマーシャルを製作するなど、銀行マンらしからぬ面での活躍はめざましく、私の知る限りでは最も生彩を放っていたように思う。

この頃彼から色々相談を受け、彼の同級生で諏中時代同じバスケット部での親友、内山隆正君（故人）も交えて、よく飲み益々親交を深めた。やがて私が同窓会の東京支部長を引受けるようになり、彼に事務局長をお願いした。凝り性の彼は新宿あたりに事務所を兼ねた「清陵クラブ」のような部屋を設け、同窓生の交友の場とし、なお地方から出張などで上京してきた同窓生達の憩いの場としたらどうかと提案した。なかなかの名案だったが、結局主として資金面で実現に至らなかった。止むなく東横線の学芸大学に近い彼の自宅が支部の事務所になった。

その頃の東京支部には改訂を重ねて三回目の、住所、氏名のみの極く普通の会員名簿があった。会員数も二、七〇〇余名から三、五〇〇余名に、そして五、〇〇〇名近い会員に増加し、名簿改訂の時機がきていた。ここでまたアイデアマン氏は名案をもち出した。つまり住所氏名だけの名簿ではなく「会員相互の心の交りあえる名簿」にしようというのである。即ち会員の自己紹介、近況短信、著作研究、趣味、会員間の縁故関係等々を掲載しようという話だ。かねてから会員の中から、会社別、団体別等の職業分類名簿や会員相互の交流に役立つような名簿をとの要望もあったので、支部幹事会に諮ったところ、賛否両論、特に経費の問題、原稿を集めるむずかしさ等、初めての試みとしての難問も多々あったが、結果的には大方の賛同を得て実施にふみ切った。勿論編集委員諸氏の協力はあったものの、五、〇〇〇人近い会員からの原稿集めは困難を極めた。

この頃彼の家を訪ねると彼の居室は会員から集まった原稿の山、尾澤家の電話料金も今迄は一万円程度であったのが、名簿の仕事が始まってから数万円になったという。それは会員の転任、移動が激しく不明な点が多い。彼はそれらの人々に対していちいち電話で確めていたのである。まさに寝食を忘れるという表現ぴったりの態度に、再三応援する人をと提唱したが彼はこの作業は一人でやる方が能率があがると聞き入れなかったし、その説にはある程度の説得力もあった。

そんな或る日、彼が倒れたとの連絡があり早速彼の家へ駆けつけると既に救急車で病院へ向かったとのこと、この時に見た彼の居室の光景は未だに忘れることができない。原稿は相当整理されていたと思うが、ショックだったのは彼の机の上に一升瓶と直径三十センチもあろうかと思われる灰皿に山盛りの吸殻。彼の強烈な仕事振りが偲ばれて慄然とした。幸い一命はとりとめたが、半身不随、言語障害という気の毒な状態になってしまった。

それから転地療養、きびしいリハビリ等彼の長い闘病生活が始まる。その結果ほとんど全快に近い状態まで回復し、御夫婦で医療設備も完備した湘南の地にある「太陽の郷」に居を定めた。

同窓会のために名簿製作のみならず、あらゆる面で理想に燃えて力限りの努力をつくされた彼も漸く快適な生活に入って長生きしてくれるものと思っていたのに、突然の悲報に接し悲しみと共に何か申訳ない気持で一杯である。心から尾澤君の御冥福を祈る。

合掌

謹んでお悔やみ申し上げます

三井為友氏（30回）



東京都立大学名誉教授。教育学。富士見出身。九八年九月十三日逝去。八六歳。かつて郷里諏訪高女（二葉）でも教鞭をとり、教え子千野敏子の「葦折れぬ」刊行に尽力。この本は当時の若者たちに大きな衝撃と影響を与えた。また戦没学生の手記「きけわだつみのこえ」刊行にも献身、わだつみ会創設に参画したことも特筆される。歌人・詩人・随筆家としても知られ、永年にわたって東京清陵会の学年幹事として常に幹事会に出席、会の発展のため協力を惜しまなかった。

＊

諏訪彰氏（38回）



地震火山学者。元気象庁地震観測所長。上諏訪出身。九九年三月十二日逝去。七九歳。日本の地震火山学の先駆者として多大の功績を残した。TBSテレビの解説者として、三原山・雲仙岳の噴火、神戸・淡路の大地震の際など画面に登場し詳細な解説をしていたのも記憶に新しい。また母校諏訪中学科学会の草分けで、三沢・飛田両先生の業績を顕彰すべく県下各地で精力的に活動した。東京清陵会では学年幹事として幹事会には必ず出席、積極的に発言・提言した。

（一面四段より続く）

連絡を密にして、基本データのメンテナンスをはかる。一方、正副会長・事務局長・事務局次長（当面は小野氏のほか、祖父江宏三氏〔64回〕、金子充宏氏〔65回〕）が定期的に、また必要に応じて集って打合せをする。そして、次長経験者が次々に事務局長を引き継いでいくシステムが確立すれば、遅滞なく運営していくことができると考えます。

しかしながら、この構想はその緒についたばかりで、新体制を定着させるには全会員のご支持とご協力が不可欠です。

「東京清陵会だより」の題字下に、新事務局の住所、電話番号、FAX番号、Eメール・アドレスを記載してあります。今後のご連絡は同事務局にして下さいますようお願いいたします。また、新体制に対するご助言・ご意見などもお寄せいただければ幸甚です。

東京清陵会を今日あるまでに育てて下さった歴代の会長・事務局長ほか多くの役員の方々、就中長きに亘って本会のために献身された林尚孝さんに、深甚なる畏敬と感謝の念を捧げ、ご報告の結びといたします。

各方面の逸材が講師「清陵勉強会」紹介

矢崎悦郎（59回）

「清陵勉強会」は、六月二九日の例会で五七回を迎えた。

当日の講師は、今年五月にNHKのチーフアナウンサーを退職したばかりの名取将さん（六一回）。「小さな旅―暮らしの輝きを見つめて―」と題して、百五十余回にわたって担当した長寿番組「小さな旅」にまつわる取材の苦労話や興味深い経験談の中で、忘れられない思い出として、尾瀬長蔵小屋の平野さん一家が、三代に亘って尾瀬の自然を守るために大変に苦労した話を聞いて感動したこと、七年間に多くの人々と触れ合い、取材した貴重な体験など話は尽きず、出席した会員一同魅了された。

偶数月の、原則として最終火曜日の夜開かれる「清陵勉強会」は、一九九〇年二月、宮坂広作さん(五〇回)、中村平治さん(同)、岩垂弘さん(五七回)らが発起人となって始まり、今日まで一度も途切れることなく、今年で一〇年目に入った。

長く続いているのに力になっているのは、この会に寄せる会員の熱意であることはいうまでもないが、コンサイスでお馴染み、三省堂社長五味敏雄さん（五七回）の厚意で、同社会議室を毎回使えるという地の利は大きい。

また、会員のネットワークを通じて多彩（多才）な講師陣が得られていることも挙げられる。

色々な分野の専門家、オーソリティーが、謝礼どころか資料の準備や交通費も自前、というあまり他では聞かない条件にもかかわらず、遠くは名古屋、広島からも駆けつけて下さる。

ここ数年のテーマの一部を紹介すると、「昨今の外食業事情」「諏訪の防災に提案する―阪神・淡路大震災から―」「戦場の枯葉剤」「人権の流れ―難民を中心にして―」「環境問題をめぐる諸問題―企業人として―」「キューバ取材を終えて―現地の最新事情―」「アジアに遺された日本関係の資料を巡って―もう一つの近代日本と植民地―」「内燃機関と技術革命」など。

会員は現在六十余名だが、毎回の例会の参加者は二〇～三〇名、横浜在住で傘寿を過ぎた林辰治さん（三五回）が毎回参加、勉強会後の二次会でも一番元気なのは嬉しい。

発足以来のメンバーで、共同通信で活躍し、湾岸戦争の折、講師も務めた伊藤力司さん(五六回)は「終の住処」富士見から駆けつける。また心理カウンセラーで、NHKラジオ「教育相談」でおなじみ、六四回の内田良子さんら女性会員や、清陵OB以外の会員も増え、隔月の例会を心待ちにしている。

会場は、JR水道橋駅西口から二分、三省堂六階会議室。講師の自薦他薦も併せて参加歓迎。但し、会場があまり広くないので、参加希望の向きは事務局　矢崎　勤務先☎〇三―三五七二―〇三〇一までご一報を。

東京清陵会第32回総会報告

御子柴英夫（65回）



■中央、校歌を指揮する保坂俊正氏

第32回東京清陵会総会は一九九八年十月十六日（金）虎ノ門パストラル「鳳凰の間」にて二六三名の参加者のもとに開催されました。

まず当番幹事六五回生我らが代表として小倉浩夫君が北海道帯広から馳せ参じ、学友会長として壇上にあった三十有余年前を思い出させる堂々たる開会宣言を行い始った。

新たに判明した物故会員四十四名のご冥福を祈り鎮魂歌が会場に流れる中黙禱を捧げた。続いて寺島敏郎会長(五〇回生)の挨拶、同窓会宮坂久臣会長(四九回生)の本部報告、母校窪田孝美校長より学校の近況報告等来賓のご挨拶をいただきました。その後慣例により寺島会長の議長のもと、総会議事を進め、林事務局長（五二回生）より、九七年度会務報告、事業報告、収支決算報告が行なわれ、小松誠監査幹事(四二回生)の監査報告により満場一致で承認された。続いて九八年度事業計画、収支決算案も承認され、会則の一部変更が提案された。その主な内容は事務局長を補佐する事務局次長を若干名置くこと、事務局を小野寿男幹事（五八回生）の小野包装内に置くこと、林尚孝事務局長の退任のことです。林さんは事務局長を十年有余の長きに亘って務められ御尽力下さいました。本当に御苦労様でした。

懇親会は、宮坂伊兵衛氏(四〇回生)宮坂正昭氏(四七回生)の宮坂醸造(株)より寄贈の「真澄」二斗樽の鏡割に始まった。出席者より矢崎猶重（二八回生)、小平祐前会長（四二回生)、諏訪より幹事応援に上京してくれた御子柴弘君(六五回生)、女性代表に美濃羽有理、酒見奈津子さん（一〇〇回生）共に現在大学生の以上五名によりとり行なわれた。続いて山田六一元同窓会長(三五回生)の音頭により乾杯が行なわれ歓談に入って会は大いに盛りあがった。この間松下勲前学校長(五九回生)よりいただいた丁重なる祝電の披露を行った。他に小山良治東海支部長（四二回生）など、多数の方々からいただきました。ありがとうございました。紙面を借りて御礼申し上げます。又、長野冬季オリンピックのスピードスケートに出場し大活躍をされた上原三枝さん（九三回生）より、母校の先輩後輩の応援支援に対しての御礼の挨拶文の披露を行った。今後の社会人としての御活躍を祈念致します。

アトラクションについては、今年は行わず、それにかわって母校のブラスバンド部による校歌演奏テープをバックに流し第一校歌（一番～八番）第二校歌（一番～十番）全部を諏訪交響楽団常任指揮者である保坂俊正君（六五回生）の指揮のもと、出席者全員で心おきなく歌いあげ大いに盛りあがった。多忙な中諏訪より上京してくれた保坂君の指揮は大変好評でした。

興奮さめやらぬ中閉会の辞を次回当番幹事を代表して生越万理子さん（六六回生）の力強い挨拶で結んで無事お開きとなりました。

最後に一年間に及ぶ準備会に出席協力してくれた六五回生の皆さん、諏訪から応援にかけつけてくれた同期生の皆さん、会の運営その他御教授御指導下さった諸先輩の皆様本当にありがとうございました。

平成11年度 同窓会本部定期総会報告

水岸一洋（66回）

諏訪清陵高校同窓会の平成十一年度定期総会は、六月二七日（日）昨年と同じ諏訪シティホテル成田屋にて午後一時より開催されました。



今年度の定期総会に当たり、ここ数年、総会への出席者数が減少しているので、同窓会役員から何とか出席者数二百人を越えるよう努力して欲しい旨の要請があり、私共当番幹事としては大変な圧力を感じざるを得ませんでした。数度に亘る打ち合わせの中で、チケット販売で…と言うことになり各支部、各学年に御無理を御願い致しました。紙上をお借りしまして改めてお詫び旁々、厚く御礼申し上げる次第です。

総会の司会は松尾邦昭君（六六回）。開会の挨拶は寺島敏郎副会長・東京清陵会会長（五十回）。物故会員を偲んで黙禱。宮坂久臣会長（四九回）、窪田孝美学校長の挨拶に続いて細川昭富士見支部長（四六回）を議長に選任して議事に入る。①平成十年度会務・会計決算、②クラブ活動同窓会後援会会計決算、③平成十一年度事業計画・予算案を承認。各支部長の紹介の後、次年度当番幹事六七回生の挨拶。最後に淵上良子副会長（五六回）の閉会のことばで総会を閉じる。

総会に続いて記念講演。長田敏行君（六六回、東京大学大学院理学系研究科教授・同附属植物園園長）が〝「植物から見た地球」―植物バイオテクノロジーと地球環境―〟と題してスライドを使っての一時間半の講演。何年ぶりかで生物の授業を受ける錯覚に学生時代を思い出し、小石川の植物園には是非一度行ってみたくなりました。

雨のため出足が悪かったのでしょうか、総会開始後も徐々に出席者は増え、記念講演終了のころには満席の状態。竹内勝海君（六六回）の司会で始まった懇親会時には椅子を追加、総勢二百五十人程の大宴会となりました。飲む程に酔う程に話も弾み、おおいに旧交を温めあい、最後は六七回生の音頭で校歌、更に六六回生による「金色の民」、万歳によりお開きとなりました。

多くの皆さんのお陰で、当番幹事としての責任を果たすことができましたこと心より感謝申し上げます。

記念講演要旨

「植物から見た地球」

植物バイオテクノロジーと地球環境

長田敏行（66回）

植物バイオテクノロジーという言葉は、今や極めて広く使われているが、その原理は植物の体細胞に分化全能性があるということによる。一九六〇年代に始まったこの研究は、私の関わった一九七〇年代のタバコ葉肉プロトプラストよりの個体再生で大きな広がりを見せることになった。これによって、性的交配に依らない遺伝子の交換が可能となって、今日の隆盛を極めることになった。しかし、生態系の撹乱の問題も生じており、それには人類の叡智を絞って対応すべきだろう。

その一方では、生物種の多様性が重要であるという認識も生まれてきた。地球上で生命の誕生以来行われてきた偉大なる進化の実験の成果を尊重しようということだ。現在、東京大学附属植物園では小笠原列島で種の絶滅阻止の研究をしている。日本のガラパゴスともいわれる無人島に人が住みつき、第二次世界大戦の戦場になったことで、固有植物が絶滅に瀕している。そのうちたった三本残っていたムニンノボタンを植物園で増やし、十七年目にしてやっと回復するかもしれないところまで達したが、その間に元の植物は絶えた。たった一本残っているムニンツツジはなんとか原生地を復元に向けて努力中というところだ。

このように地球を全体として一つの生態系としてとらえ、その中で植物の占める重要性が認識されれば幸いで、そのような考え方が今後一層必要になると考えている。

東京清陵会の現況

（一九九九・七・三〇現在）

データベースから東京清陵会の現勢を見ると次のとおりである。

一、同窓会東京清陵会会員の定義

(1)　首都圏（東京、神奈川、埼玉、千葉、群馬、栃木、茨城）在住の同窓生（ただし、退会申入れ者を除く）。

(2)　転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生。

二、会員現勢：総数、三、七九七名（住所不明者五四六名を除く）

(1)　都県別会員数

東京都：一、八九二名、神奈川県：七七六名、埼玉県：四二〇名、千葉県：四七九名、茨城県：八二名、群馬県：二八名、栃木県：二三名、その他：九七名

(2)　年次別会員数（別表1）

三、会費納入状況（一九九七・四～二〇〇二・三会計期）

(1)　納入者総計　一、〇〇九名

(2)　年次別会費納入者数（別表1）

(3)　年度別納入額及び人数（別表2）

別表1　年次別会員数と会費納入結果（7月30日現在）

回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)
18	2	0	2(−)	46	76	2	78(54)	75	44	14	58(14)
19	1	0	1(−)	47	69	6	75(48)	76	35	15	50(13)
21	2	0	2(−)	48	80	3	83(42)	77	52	15	67(21)
22	1	0	1(−)	49	114	5	119(69)	78	42	25	67(15)
23	4	0	4(−)	50	101	6	107(70)	79	43	20	63(17)
24	1	0	1(−)	51	111	7	118(73)	80	33	18	51(7)
25	6	0	6(−)	52	123	1	124(93)	81	38	15	53(8)
26	7	0	7(−)	55	36	1	37(22)	82	33	18	51(7)
27	10	0	10(−)	56	120	9	129(70)	83	53	37	90(23)
28	14	2	16(−)	57	124	4	128(79)	84	39	16	53(14)
29	3	1	4(−)	58	115	5	120(73)	85	51	22	73(12)
30	13	0	13(−)	59	111	7	118(62)	86	37	11	48(7)
31	14	1	15(−)	60	117	9	126(70)	87	27	7	34(2)
32	18	3	21(−)	61	110	6	116(53)	88	23	16	39(7)
33	16	2	18(−)	62	112	9	121(52)	89	27	14	41(8)
34	20	1	21(−)	63	124	7	131(80)	90	17	14	31(1)
35	32	1	33(−)	64	93	5	98(60)	91	19	10	29(1)
36	33	3	36(−)	65	88	4	92(40)	92	40	7	47(4)
37	20	2	22(−)	66	88	7	95(40)	93	9	5	14(2)
38	33	1	34(−)	67	95	9	104(36)	94	4	1	5(0)
39	35	1	36(−)	68	88	11	99(38)	95	1	3	4(0)
40	34	1	35(−)	69	91	8	99(40)	96	5	5	10(1)
41	53	0	53(−)	70	95	12	107(36)	97	1	1	2(0)
42	50	2	52(42)	71	66	16	82(21)	98	3	0	3(0)
43	59	1	60(39)	72	53	14	67(18)	計	3797	546	(1731)
44	62	1	63(41)	73	46	21	67(20)				
45	61	1	62(42)	74	72	19	91(26)				

注）1)　(　)内は現会計期（1997.4～2002.3）会費納入者の人数
75歳以上（41回以前）の会員は会費免除
2)　不明者は以前東京清陵会に登録されていて現在所在不明のもの
3)　前会計期（1992.4～1997.3）は1997年3月で終了
4)　会費納入者数1,731名と今期納入者数の差は終身会費納入その他による
5)　終身会費納入者総数1,054名（内15名死去、9名所在不明）

別表2　年度別会費納入額および納入者数

前期納入額総計(1992.4～1997.3) 10,936,585円；2,079名				
内訳	1992年4月～	小計	4,351,185円	(1,021名)
	1993年4月～	小計	2,090,400円	(353名)
	1994年4月～	小計	1,428,800円	(236名)
	1995年4月～	小計	1,855,600円	(289名)
	1996年4月～	小計	1,210,600円	(180名)
今期納入額総計(1997.4～1999.7) 5,238,000円；1,010名				
内訳	1997年4月～	小計	3,577,200円	(734名)
	1998年4月～	小計	1,620,800円	(272名)
	1999年4月～	小計	40,000円	(4名)

■一九九八年度会務報告

一九九八年

9・18　東京清陵会だより第九号三九〇〇部発送。

10・16　第三二回東京清陵会総会：虎ノ門パストラル鳳凰の間、六五回生担当、二六三名出席。来賓：宮坂久臣会長、窪田孝美校長、有賀裕副会長、矢崎斉男氏。事務局次長新設の会則変更を承認。小野寿勇（五八回）、藤森宏一（六三回）、祖父江宏三（六四回）の三氏が事務局次長に選任された。来年度の事務局長に藤森宏一氏が就任することを報告。出し物は特に行われず、宮坂亮一氏（五〇回）編曲、母校吹奏楽部による校歌伴奏吹奏楽（テープ）が初登場し、諏訪響指揮者保坂俊正氏（六五回）の指揮により、校歌斉唱が行われた。

一九九九年

1・23　第四回女性の集い：せいりょう、三二名出席。

3・26　「東京清陵会だより」第10号第一回編集委員会：せいりょう、寺島会長以下一六名出席。

4・12　事務打合会議：菱の実曙橋ハウス、五名出席。

4・23　第10号第二回編集委員会：神田シティホテル、九名出席。

4・26　事務局会議：小野包装、今年度の運営について、九名出席。

5・20　南信同窓連幹事会：新宿ラ・コンテ、一名出席。

5・24　長野県同窓連常任理事会：日本教育会館、一名出席。

5・29　本部同窓会常任幹事会及び幹事会：清陵同窓会館、五名出席。

6・5　文化人鼎談ビデオ撮影及び取材：新高輪プリンスホテル、一一名出席。

6・9　南信同窓連打合会議：新宿ラ・コンテ、二名出席。

6・11　常任幹事会：南青山会館、一九名出席。

6・19　長野県同窓連総会：虎ノ門パストラル、一名出席。

6・27　本部定例総会及び懇親会：諏訪シティホテル成田屋、記念講演・長田敏行氏「植物から見た地球」、出席約一七〇名

7・9　第33回総会準備打合会議、神田シティホテル、出席六六回生八名

7・9　第10号第三回編集委員会：六名出席

7・30　事務局会議：小野包装、七名出席

8・2　第四回編集委員会：中央印刷、六名出席

8・5　幹事会：南青山会館、四一名出席

8・11　第五回編集委員会：中央印刷、九名出席

1998年度収支決算報告(案)

自 1998年4月1日　至 1999年3月31日　(単位：円)

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
総会費	2,022,000	総会費用	2,606,227
会員会費	1,620,800	会議費	295,961
年会費	50,000	諸会費	11,000
寄付金		通信費	710,930
受取利息	31,184	印刷費	222,875
前期繰越	16,330,130	事務雑費	273,067
		会報発行費	631,242
		電話及FAX設置費	111,696
		次期繰越	15,191,116
計	20,054,114	計	20,054,114

1999年度収支予算(案)

自 1999年4月1日　至 2000年3月31日　(単位：円)

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
総会費	2,400,000	総会費用	2,400,000
会員会費	1,600,000	会議費	300,000
年会費	50,000	諸会費	30,000
寄付金		通信費	700,000
受取利息	30,000	印刷費	200,000
前期繰越	15,191,116	事務雑費	400,000
		会報発行費	750,000
		事務用パソコン備品費	250,000
		次期繰越	50,000
			14,191,116
計	19,271,116	計	19,271,116

あとがき　3月末の第1回編集委員会。第10号を担当する当番幹事として「一九〇〇年代最後の年、自分史を書くつもりで、熱き清陵の時代をビジュアルに総括する」と大風呂敷を拡げてしまいました。それが2頁以降の大特集です。あまりに突出した企画に「伝統軽視である」と先輩方からお叱りをいただきました。諸先輩の東京清陵会だよりへの愛着の深さを痛感しました。

それにしても、寄せられた写真や文章に溢れる「自主・自治」「千万人と雖も吾往かん」の清陵魂。それが、あの頃を思い出すよすがになれば、我ら66回生、ゴタッ小僧共の望外の幸せであります。

訃報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略)

氏名	年次	逝去年月日
中城　龍雄	(23回)	1993. 8. 8
内山　直三	(67回)	1996. 2.14
真島　章	(93回)	1996. 3.18
竹村　功	(39回)	1996.11.21
吉川　省三	(44回)	1997. 6.26
矢崎　武泰	(44回)	1997. 7.19
今村　義雄	(31回)	1997.10.13
早川　斐雄	(36回)	1997.10.13
有賀　権吉	(47回)	1997.10.22
羽毛田昭吾	(49回)	1997.11. 2
宮坂　謙	(38回)	1997.11.30
増沢　四郎	(39回)	1997.12. 6
小林　由蔵	(37回)	1997.12.24
尾澤　修治	(25回)	1997.12.29
小林　公二	(36回)	1998. 1. 7
松澤　誠	(60回)	1998. 1.27
河手　博	(44回)	1998. 2.10
福島　朱美	(76回)	1998. 2.16
永田　真一	(59回)	1998. 3. 7
宮坂　岩男	(42回)	1998. 3.16
藤森　清	(43回)	1998. 4. 9
五味　益充	(28回)	1999. 4.15
横内　豊彦	(32回)	1998. 4.16
小口　達雄	(42回)	1998. 4.18
小口　彬	(41回)	1998. 5.14
三村　三	(34回)	1998. 6. 1
小山　信雄	(37回)	1998. 6.16
片倉　清志	(41回)	1998. 6.25
五味　巻義	(32回)	1998. 7. 7
大村日出雄	(49回)	1998. 7.24
和田　光夫	(30回)	1998. 8. 7
小坂　宏夫	(47回)	1998. 8.14
清水　孝雄	(18回)	1998. 8.31
三井　為友	(30回)	1998. 9.13
荒張　英一	(85回)	1998. 9.18
小口　傳	(44回)	1998.10. 2
藤森　健次	(61回)	1998.10.14
浅川　忠夫	(35回)	1998.11.30
小川　真一	(38回)	1998.12. 3
尾澤　賢一	(37回)	1998.12.12
長谷川英明	(40回)	1999. 1.14
藤森　久弥	(36回)	1999. 1.31
荒木　嘉隆	(38回)	1999. 2.11
服部　勉	(36回)	1999. 2.20
林　隆夫	(57回)	1999. 2.21
小口　嘉治	(36回)	1999. 2.28
諏訪　彰	(38回)	1999. 3.12
河西　國雄	(47回)	1999. 3.15
篠原　重平	(33回)	1999. 4.15
松澤　義美	(40回)	1999. 4.30
大島　清美	(36回)	1999. 5.18
伊藤　尭彦	(61回)	1999. 6. 1
堀田　幸孝	(36回)	1999. 6.27
横内　敬一	(43回)	1999. 7. 2
矢島　重巻	(52回)	1999. 7.22
五味　健吉	(52回)	1999. 8.21

(事務局に連絡が入った方)